

せとる

くおーたりー

# C.E.T.L. Quarterly

教育・学習活動支援センター広報 No.19

発行日 6. Jun. 2005

## 巻頭言 通信教育部生への学習支援体制

通信教育部長 高村 忠成

創価大学通信教育部は、在籍者数 2 万 1 千名を誇り、文字通り日本一の通信教育になっている。しかも、その数は年々増えている。学習方法の多様化、高齢化社会の到来、生涯学習への意欲の向上などによって、今後とも通信教育への関心は増大していくであろう。それだけに、本学としても、通信教育部生の受け入れ、すなわち、具体的には学習支援体制を十全に確立しておく必要がある。学生への学習支援こそ、大学の、学生に対する最大のサービスと思うからである。

現に、通信教育にとっての最大の課題は、学生の学習意欲をいかに持続させるかにある。通学部学生と違って、通信教育部の学生はつねに教職員に直接面接して、勉学上の疑問、質問をぶつけるわけにはいかない。基本的にはすべて自分で、書類、教科書、参考書などと格闘しながら解決していく以外にない。ここに通信教育部生の最大の困難があり、それを超克できない学生は勉学も手につかず、脱落してしまうので

ある。創大では、こうした傾向をなくし、学生が何とか学問を持続させ、卒業の栄冠を勝ち取れるように、次のような学習支援体制をしている。

第 1 に、「自立学習入門」という科目の設置である。これは、レポートの書き方、本の読み方、講義の受け方など、学問をすることでの基本的な心構えをわかり易く解説した本を、通信教育部の教員で作成し、通信教育部生が読んでもわかるし、また講義でも聞けるようにしている。この科目の受講によって、通信教育部生の学習効果が飛躍的に向上している。

第 2 に、電話による相談体制の充実である。これには、2 種類あり、ひとつは専属の職員が配置され、午前 9 時半から午後 5 時まで、いつでも、どんな相談にも対応するという措置を講じている。もうひとつは、教員が、毎日順番で担当し、主として、学習相談にのるというものである。E-mail でも可となっている。

第 3 に、地域ごとに学習会を開く、とい

うものである。これは今日では、かなりの地域において開催され、通教生同士の触発の良い機会となっている。

なお、夏期スクーリング期間中には、教員による「オフィス・アワー」が設置され

ており、かなりの学生が相談に訪れている。

今後、さらに学習支援体制を強化・充実させ、学生のニーズに応えたいと思っている。

## 携帯出欠管理システムに関する CETL・ワークショップを開催

経営学部の岡田勇先生に講師をお願いして、4月5日（火）に今年度最初のワークショップが開催された。

出席管理は、受講者が多くなればなるほど、時間もかかり、面倒で厄介に思えてしまうし、かといって成績評価のためには疎かにできるものではない。そうした想いから、岡田先生は携帯電話を利用した出席管理システムを開発され、実際にご自身の講義で活用されている。



プレゼンテーション中の岡田先生

### 携帯出欠管理システムに関するワークショップを担当して

経営学部 岡田勇

光栄にも、本年度最初の FD ワークショップとして、筆者の開発した「携帯電話を利用した出席管理システム」の紹介と運用事例に関する報告の機会に恵まれた。スタッフの懸念をよそに 10 名を超える先生方が熱心に聴いてくださった。講演にはいらっしやらなかったけれども、内容を知りたいという連絡も多くの先生からいただき、時宜を得たテーマであるとの感を深くした。

報告概要は次のとおり。昨年度後期に担

当した 150 名程度のあるクラスにおいて、携帯電話を利用した出席管理システムを用いた事例を紹介し、システム導入の背景とシステム概要を説明した。次にシステムで得られるデータと学生アンケートからシステムの効果を分析した。最後に、本システムの改善点を提案した。

質疑の中心は不正利用に関するものが多かった。熱心に聴いてくださった証左であると感謝している。実際に 4 名の先生方から登録申請をいただいた。講演を通して

多くの先生から提案も頂いた。システムの更なる改善を行い、普遍性を高めたいと思っている。

なお、発表資料は公開しているので、ご

興味のある方は遠慮なく [okada@soka.ac.jp](mailto:okada@soka.ac.jp) までご連絡いただきたい。

## 岡田勇先生によるワークショップに出席して

経営学部 金子武久

私が担当している経営学部科目「消費者行動論」という授業は、例年 150～200 名の学生諸君が履修しています。これまでの経験を踏まえ、出席取りについて私は次のような小目標を考えていました。(1) 出席／遅刻判別目的のために出席時刻を記録すること、(2) 手間なく素早く出席取りができること、(3) ダイヘンを不可能にすること、(4) 出席状況のデータ化と集計作業の短縮化、(5) 出席をとる際に学生一人一人と僅かながらでもコミュニケーションがとれること、です。このようなことができたらいいなあと思っていたところに、去る 4 月 5 日、LB110 教室において表記タイトルのワークショップが開催されました。10 名弱の教員が参加したそうです。ワークショップでは、携帯電話を利用した出欠管理システムの素晴しさはもちろん、岡田先生のユーモアあふれる話術で参加者に対する心配りまであり、たいへん感銘をうけました。

提示されたシステムでは、上記 (1) に関して、出席時刻を記録しつつリアルタイムで出席／遅刻の判定を行い、その判定をも記録していました。ややシステムに負荷をかける設計だと思いました。(2) につい

ては、一人の学生が複数の科目でこの出席管理システムを利用すると、科目別に出席記録用の URL を管理する必要があり、やや煩雑さを感じてしまう仕組みでした。

(3) については、1 セメスターを通じた実験的な運用を経て、ダイヘン防止上の有効性がかなりの程度確認されていました。

(4) については、担当者の作業負担を著しく軽減する素晴らしいものでした。(5) については未対応でしたがこれはおまけ事項です。

学生諸君にとって 1 セメスターで 1～2 科目程度でしたら、提示されたシステムは十分実用レベルだと思いました。多数の科目での利用を考えると、いくつかの設計やプログラムの変更が必要のように思えました。ワークショップ終了後に考えたことを含め、門外漢である私は自分の無知も省みず、岡田先生と口頭ならびにメールで意見交換させていただきました。

この文章を書いている段階でいくつかの事柄が既に陳腐化しています。この文章が印刷されるころには、これらを遥かに超える改良が施されていることでしょう。岡田先生の熱意と努力に本当に敬意を表します。

## 先輩が語る！「勉強法ガイダンス」を開催

CETLでは新入生を対象にした「勉強法ガイダンス」を開催している。本年度3回目になる今回は4月6日にA棟で開催され、600名以上もの参加者が集った。当初の予定よりも大規模になったため、急遽2回目を4月13日に本部棟にて行わなければならないほどの盛況ぶりを示した。

内容は大学における学習が高校までの学習とは異なることを踏まえ、大学の学習に必須となる基本的な要点について解説を行った。シラバスの見方、教科書の読み方、予習の重要性、ノートのとり方の例示といった各項目について、大学院生・学部上級生によって熱のこもったアドバイスがなされた。

参加した新入生からは、「高校とはまったく違う学習スタイルで授業を受けなければいけないということがわかりました」「授業を受ける前に、大学の講義がどのよ

うなものなのか理解できたので、準備をすることができてよかったです」「講義についていけるか不安でしたが、少しやっつけていけるような気がしてきました」などの感想が寄せられ、「各学部別にもっと詳しい話を聞かせてほしい」などの要望も寄せられた。

CETLでは6月にレポート講習会を予定しているが、「是非参加したい」「楽しみにしています」との声を数多く聞くことができた。



熱心に聞き入る新入生たち

### 2005年度 CETL 所員一覧

<教育学部> 坂本 辰朗 (センター長)

<教育学部> 関田 一彦 (副センター長)

<経済学部> 神立 孝一、小林 孝次

<法学部> 宮崎 淳

<文学部> 金子 弘、清水 強志

<経営学部> 岡田 勇

<通信教育部> 西浦 昭雄

<工学部> 戸田 龍樹、坂部 創一

<研究所> 小出 稔

<WLC> 尾崎 秀夫

<専属職員> 滝川 満子

## 評価技法に関する CETL・ワークショップを開催

4月26日（火）、坂本辰朗教育・学習活動支援センター長を講師に、本年度二回目となるワークショップが開催された。今回のワークショップはサロン形式で話し合いがもたれたこともあり、リラックスした雰囲気の中、学生の学習支援を目指した評価技法について、活発な議論が展開された。



評価技法について話し合う参加者

### CETL・ワークショップ——授業内で使う評価技法

センター長 坂本 辰朗

「日々の授業で学生の理解度をチェックするにはどうすればよいのか」——これは多くの先生方の悩みであると思います。むしろ、在来的な小テストという手段もありますが、これを使いすぎると学生を萎縮させる恐れもあります。

授業内での学生の理解度や反応を把握する簡便な方法としては、「ミニッツ・ペーパー」がよく知られています。これに類似した授業感想文メモなどを使用しておられる先生方も多いと思いますが、実はこれ以外にもさまざまな技法が開発されています。「学生が実際に何を、どのように学習しているのか」を把握することはなかなか難しいわけですが、多様な技法を組み合わせることで、その輪郭が見えてくるものです。この評価技法は成績をつけるのではなく、授業の改善のためにおこなわれるという点で、テストやその他の評価とは異なる

ります。また、ほとんどが、簡単で——実施のために特別な研修等を必要としません——時間がかからず、無記名で、授業内でおこなわれるところに特徴があります。

教員にとっては、①学生の学習や教授法についてフィードバックをえることで、コースの修正が可能、②在来的な評価技法（試験・レポート・プレゼンテーションなど）に比べ、はるかに少ない時間・資源で実施可能、③学生との信頼関係の構築、④「教授とは、学生の学習の促進である」との教授観の浸透などのメリットが、学生にとっては、①「自分の学習を監督するのは自分である」という学習観の促進、②特に大クラスにおける疎外感や孤独感の防止、③自身の学習スキルの改善、④「教員は学生の学習の成立に配慮している」ことの証明、などの利点が考えられます。

最後に、ワークショップ当日のために、

アメリカ合衆国で広く使われている大学  
教員向け授業内評価法ハンドブックの抄  
訳版を作成された安野舞子さん（本学法学  
部卒、カリフォルニア大学ロサンゼルス校

Ph.D.) に御礼を申し上げます。なお、こ  
の抄訳版ハンドブックをご希望の先生は  
センターまでご一報下さい。

## Information

### ・夏休みを利用した各種教員研修参加への支援

CETL では今年も夏季研修派遣を行います。前年同様、次の 2 企画への派遣が決定  
しています。

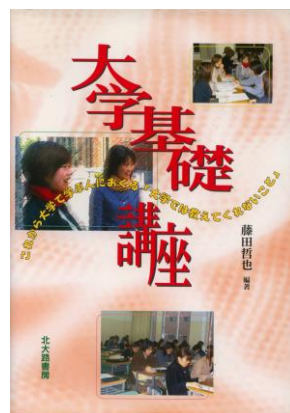
①私大連主催「学びの共同体をめざして」(8/3-5, グランドホテル浜松)

②協同学習ワークショップ (7/18-22 アメリカ)

その他、個人的に各種団体の FD 研修プログラムに参加を検討されている先生方  
については、先生方からの申請に基づき可能な限り参加費などへの補助を行います。参  
加される前に一度、CETL にご相談ください。

### ・FD 関連図書の紹介

藤田哲也著『大学基礎講座』(北大路書房) は CETL 主  
催の新入生向け「勉強法ガイダンス」が参考している図書  
の一つです。教科書として本学のいくつかの基礎ゼミにおい  
ても使用されています。大学の授業で必要とされる、基礎的  
な学習方法について解説されています。大学の学習は、高校  
までとはかなり異なるので、基礎となる技法を知っている人  
とそうでない人とは、授業の理解にも差が生じますし、結  
果として大学での学びに興味・関心を持てるかに影響してき  
ます。新入生のみならず、学びを指導する先生方にも是非ともお勧めしたい一書です。



## 編集後記

さまざまな形で多くの先生方がよりよい学習  
体制の構築を目指して活動されています。「くお  
ーたりー」が、それらの試みを横断的につなげ  
ることに貢献できればと考えながら編集に携わ  
らせていただきました。(S)

## C. E. T. L Quarterly No. 19

編集・発行

創価大学 教育・学習活動支援センター

〒192-8577 八王子市丹木町 1-236

Tel : 0426 (91) 9782 内線 : 2146

E-mail: cetl@soka.ac.jp